

## 不死をめぐる神話——『東海道四谷怪談』

古 川 のり子

髪は抜け落ち、片目の腫れあがった醜いお岩の幽霊が登場する『東海道四谷怪談』は、日本でもっともよく知られた怪談のひとつである。歌舞伎脚本作者・四世鶴屋南北(1755-1829)の晩年の作品で、文政八年(1825)七月、江戸中村座において初演された。はじめは『仮名手本忠臣蔵』の中に組み込む形で上演され、『四谷怪談』の最終幕の後に、『忠臣蔵』の十一段目「討ち入り」の場面が演じられて完結した。しかしのちに『四谷怪談』の部分は切り離され、人気の演目として現代でも繰り返し上演されている。

廣末保氏は『東海道四谷怪談』について論じ、幕藩体制の崩壊期における、善悪を超えた猥雑なエネルギーに形を与えた作品として高く評価した<sup>1)</sup>。この作品に関しては、近世文学・演劇等の専門家によってすでに多くの優れた研究がなされており、物語の題材となった事件や、それを文芸化した先行作品の存在なども明らかにされている<sup>2)</sup>。古代の神話研究を専門とする筆者がこれらの研究に付け加えることは何もないが、ここであえてこの作品を古事記・日本書紀の神話と比較してみたいと思う。複雑な構成をもつ『四谷怪談』の物語は、神話と密接な関わりをもち、イザナミの神話、イワナガヒメとコノハナノサクヤビメの神話という二種類の死の起源神話を重ね合わせることによって、「不死の喪失とその再獲得のための試み」の神話として読むことが可能な側面を表すようになると思うからである。

## 1 お岩とイザナミ

### ——「美」から「醜」への劇的な変身

イザナミは記紀の創成神話に登場する大女神格で、イザナキとともに最初の男女として出現したとされる。古事記によれば、二神の最初の結婚によって、イザナミはその身体から日本の国土の島々と、海・山・川・草・木・風などのたくさんの神々を生み出した。しかし最後に火の神を生んだために身体を焼かれて死に、最初の死者となって地下の黄泉の国へ行く。夫のイザナキは妻を連れ戻すために黄泉の国まで追いかけるが、腐って蛆が湧いた醜い死者としてのイザナミの姿をのぞき見て恐れおののき、地上世界へ逃げ出そうとする。イザナキは地上と地下の境目を大きな岩で塞ぎ、怒って追いかけてきたイザナミと、岩をあいだにはさんで絶縁の言葉を交わし合う。このときイザナミは地上の人間たちを一日に千人殺すと誓い、イザナキは一日に千五百人の産屋を立てることを誓った。こうして地上の人間たちに「死」の運命が定まり、イザナミは「黄泉津大神（よもつおほかみ）」——黄泉の国の支配者となったという。

イザナミは、その身体から万物を生み出す母神として大地そのものを神格化した存在＝大地母神であると考えられている。大地が、そこから生まれたすべての生き物が死んで帰っていく死者の国そのものでもあるように、この女神は万物の母神であると同時に、人間たちに死の運命をもたらす恐ろしい死の女神（黄泉津大神）でもある<sup>3)</sup>。このような大地母神イザナミの「生と死」の両面的な性質は、彼女自身が「美しい女神」から「醜い女神」へと変身を遂げることによっても表現されている。

イザナキと結婚し多くの国土や神々を生み出すときのイザナミは、「愛をとめ、可愛少女（えをとめ）」（記、書紀四の1）、「可美少女（うましをとめ）」（書紀四の本文）、「美哉（あなにゑや）、善少女（えをとめ）」（書紀四の5）と呼ばれるような、生む力に満ちた若く美しい女神であった。ところが黄泉の国では、

故、左のみみづらに刺せる湯津津間櫛の男柱一箇取り闕きて、一つ火燭して入り見たまひし時、蛆たかれころろきて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には拆雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、併せて八はしらの雷神成り居りき。

(古事記)

[illegible]

まち相貌が崩れる秘法の毒薬で、お岩の夫・伊右衛門が醜くなった妻に愛想をつかし、伊藤家の娘・お梅と結婚するようにさせるための企みだった。お岩はその薬を飲むやいなや発熱して苦しみ、「面体見苦しく」変わり「世にもみにくい悪女の面」となって死んでいく。

ト思入れ。この時、抱き子しきりに泣くゆゑ、ゆすぶりつけ〜、  
産所をはなれ、よぎところへ来たり。よろ〜として

お岩 あゝ、また目舞がする。血の道のせゐであらう。この粉薬、  
マア〜これなどたべて。

ト合方、虫の音、時の鐘、お岩、件の粉薬を茶碗へあけ、土  
瓶の白湯をつぎかけ、呑む事あつて

お岩 おゝ、これでちつとは気持も直らう。ドリヤ、大事のやゝを。

ト抱き取らんとして、また候にはかに病氣おこりし体にて、苦  
痛の思ひ入れ

やゝゝゝ。今の薬を呑むとしきりに、常よりも気持が、アゝ、コリ  
ヤ顔が熱気して、一倍氣やひが。アゝ、苦しや

(中略)

ト持ち添へて鏡を見せる。お岩、我が顔の(鏡に)映るを見  
て

お岩 やゝ、着類の色やい、頭の様子。コリヤコレほんまに、わしが面が  
このやうな、悪女の顔になんてまあ、コリヤわしかいの〜、  
わたしがほんまに顔かいなう<sup>4)</sup>

お岩がももとは美しい女性だったことは、隣家の娘に一目惚れされるような  
伊右衛門が彼女に強く執着していたことや、彼の夢の中に現れたお岩によく似  
た女が「美なやつ」と表現されていることからもうかがうことが出来る。そのお  
岩が、「エゝ恨めしい」と言いながら抜け落ちた髪をねじ切って生き血をしたた

らせる変身の場面は、それを見た按摩の宅悦が震え出すほどの恐ろしさだった。お岩もイザナミも、「子を産む美女」から「恐ろしい醜女」へと変貌を遂げる。また服毒したお岩が「熱気・発熱」に苦しんだとされていることは、イザナミが火傷にしみながら死んだこととよく似ている。

このような「美」から「醜」への変身は、のちにお岩の幽霊に悩まされる伊右衛門の夢(「夢の場」)の中でもう一度繰り返されている。伊右衛門がお岩によく似た美女と二人で籠もった簾の内を、仲間の秋山長兵衛が覗いてみると、そこには死霊となったお岩の姿があった。

長兵 これ民谷へ、どうだきまつたかへ。ア、浦山しい。どれ、ちと窺うてやらう。

ト簾にかへり、隙間より内をのぞき、悔りして  
 ヤ、、、、アリヤなんだへ。今の娘のあの顔は、アリヤ人間ぢや  
 アあるまいへ。サアへ、こいつはこへにはゐられぬ。この灯籠  
 でもさげて、はやく逃げて行かうか。

イザナキが禁忌を犯して御殿の内を見ることによって、死者としてのイザナミの姿が暴露されたように、ここでは、やはり男の「のぞき見」によって死霊としてのお岩の姿が明らかにされている。

醜い妻の姿を見た夫(イザナキ・伊右衛門)は、すぐに離縁を決意し、追いつがる妻を振り払って去って行く。一方のイザナキは、恐れおののいて一目散に逃げ出して行った。

時に伊奘諾尊、大きに驚きて曰はく、「吾、意はず、不須也凶目き汚穢き国に到にけり」とのたまひて、乃ち急に走げ廻りたまふ。時に、伊奘冉尊、恨みて曰はく、「何ぞ要りし言を用ゐたまはずして、吾に恥辱みせす」とのたまひて、乃ち泉津醜女八人、一に云はく、泉津日狭女といふ、を遣

して追ひて留めまつる。故、伊奘諾尊、剣を抜きて背に揮きつつ逃ぐ。

(書紀五の6)

「恥辱」を被ったことを恨んで追いつがる妻や、醜女たち・雷たちを振り切つて逃げ、イザナキは地上世界と黄泉の国との境を大きな岩で塞ぎ、夫婦の絶縁を宣言する。この時イザナミが「一日に千人縊り殺してやる」と誓ったことによって、地上のすべての人間たちに「死」の運命がもたらされた。

時に、伊奘冉尊の曰はく、「愛しき吾が夫の君し、如此言はば、吾は当に汝が治す国民、日に千頭縊り殺さむ」とのたまふ。伊奘諾尊、乃ち報へて曰はく、「愛しき吾が妹し、如此言はば、吾は当に日に千五百頭産ましめむ」とのたまふ。

(書紀五の6)

他方、『四谷怪談』の民谷伊右衛門も、醜くなったお岩の顔を見るやいなや態度を豹変させ、それまではけっして別れようとしなかった彼女との離縁の意志を鮮明にする。

お岩 わたしが顔付は、よいか悪いか知らねども、気持はやつぱり同じ事。  
一日あけしいひまもなう、どうで死ぬるでござんせう。死ぬる命は惜しまねど、産れたあの子が不憫に思うて、わたしや迷ふでござんせう。  
モン、こちの人、おまへわたしが死んだなら、よもや当分

伊右 持つてみせるの

お岩 エゝゝゝゝゝ

伊右 女房ならばぢきに持つ。しかもりつばな女房を、おらア持つ気だ。  
持つたらどうする。世間にいくらも手本があるわへ。

(中略)

伊右 コレへゝ、継母にかけるがいやなら、あの餓鬼をつれて行け。まだ

水子のあの餓鬼と、新規にはいる女房と、一口に言へるものかへ

このときすでに伊右衛門は伊藤家の企みを聞き、お梅との結婚を承諾していた。彼は、毒薬によってお岩の顔が変貌していることを確認するやいなや、彼女が死んだら新しい立派な女房をもつと宣言し、いやなら子を連れて出て行けと突き放す。そして祝言に必要な金を工面するために、お岩が身につけている着物や赤子を守る蚊帳までも奪い取り、すがりつくお岩の爪が蚊帳に引っかかって剥がれ血まみれになるのを振り払って家を出て行く。

このあと、伊藤家と伊右衛門の企みのすべてを知ったお岩は、「この身をはたす毒薬を、両手をついての一礼は、今々思へば恥づかしい。さぞや笑はん、くやしいわいの〜」と、身に受けた恥辱に泣き伏す。このことは、夫イザナキに逃げ出されたイザナミが、「吾に恥辱みせます」と言って恨んだ姿を思い出させる。そしてお岩は次のような恨みの言葉を残して死んでいく。

お岩 （前略）たゞ恨めしき伊右衛門殿、喜兵衛一家の者どもも、なに  
安穩におくべきや。思へば〜、エ、恨めしい

お岩の死体は、伊右衛門がお岩との姦通の罪をきせて殺した奉公人(小仏小平)の死体とともに戸板の裏表に打ち付けられ、川に流し棄てられる。しかしこの時からお岩の死霊による復讐が始まる。お岩が死んだその部屋で、その日の内に、伊右衛門とお梅との祝言が挙げられた。するとお梅の顔がお岩に変わる。さらに伊藤喜兵衛の顔が小仏小平に変わって赤子(お岩と伊右衛門の息子)を喰い殺す。驚いた伊右衛門は、新しい妻と舅の首を切り落としてしまう。

伊右 （前略）コレ花嫁御、うつむいてばかりゐる事はない。恥づかしくとも顔をあげ、日頃の恋の叶うた今宵、そんなら目出たくこちの人、我が夫かいのと笑うて言やれな

ト寄り添ふ

お岩 アイ。ちのひ、我が夫かいの

ト顔をあげ、件の守り(お梅の守り袋)を差し出し、お岩の顔にて、伊右衛門を恨めしげにきつと見詰めて、けら〜と笑ふ。伊右衛門ぞつとせし思ひ入れにて、辺りなる刀引き取り、抜き打ちにぽんと首打ち落す。この首、前の縁へ見事に落ちる。お梅の本首出て、薄ドロ〜、首の辺りへ鼠出てむらがる。伊右衛門、首をよく〜見て

伊右 ヤ、い、やつぱりお梅だ。コリヤ早まつて

トつか〜と行き、辺りの差し添へをたづね、腰にぼつ込み、刀引きさげ、つか〜と行き、屏風引きのける。内に、喜兵衛、赤子を抱き、掻巻を着て寝てゐる。伊右衛門、近寄つて、ゆり起こし

コレ舅殿、珍事がござる。アノ間違て

ト喜兵衛を引き起こす。その顔、小平の菊五郎<sup>5)</sup>の顔にて、抱子を食べ殺せし体にて、口は血だらけ。伊右衛門の顔を見つめ

小平 旦那様、葉を下され

ト言ふに目をつけ

伊右 ヤ、おのりや小平め。現在小児を。

ト言ひざま抜き打ちに首打ち落とす。よきところへ、喜兵衛の本首、血に染みて、おけずへより頭の方へ、蛇一疋、本首にまとひ、うごめく。伊右衛門、よく〜見て

ヤ、切つたる首はやつぱり舅。かゝるたゝりにうか〜こゝには。

ト門口へかけ行く。

こうして伊右衛門は新妻と舅を殺し、殺人者として追われる身となった。その



彼が川で釣りをしているところへ、お岩と小平の死体をのせた戸板が流れ着く。戸板を引き上げると、お岩の死体は両目を見開き伊右衛門を見つめて、彼女を死に追いやった人々に死を宣告する。

トすぎ合方。時の鐘。おろせし竿を引き上げる。これに菰のかゝりし杉戸の死骸流れ出る。伊右衛門、思はず引き寄せて、かけたる菰を取る。薄ドロ〜。こゝに、菊五郎、お岩の死骸にて、両目を見開き、きつと見つめて、この死骸、鼠のくはへし守袋を持つてゐる。伊右衛門、怖気だつて

伊右 お岩〜、許してくれろ。あやまつた。

お岩 民谷の血筋、伊藤喜兵衛が根葉を枯らしてこの恨み

「根葉を枯らして」とあるように、お岩は直接の仇である夫や喜兵衛だけでなく、彼女の死に関わったすべての人々と、その血を同じくする一族・子孫にまで死を宣告した。ここには、真っ先に死霊に喰い殺された彼女自身の息子も含まれている。このことは、イザナミが「吾は当に汝が治す国民、日に千頭縊り殺さむ」と宣言して、彼女の子孫でもある地上のすべての人間たちに死の運命をもたらしたことを彷彿とさせる。お岩もイザナミもどちらも裏切った夫を恨みつつ、子を産む美女から、子孫に死の運命をもたらす醜女へと変貌を遂げたのである。

## 2 お岩・お梅とイワナガヒメ・コノハナノサクヤビメ ——「石」と「花」の選択

記紀神話のなかにはイザナミの神話の他にもう一つ、死の起源を語る神話が伝えられている。山の神オオヤマツミの娘・イワナガヒメ(石長比売・磐長姫)とコノハナノサクヤビメ(木花佐久夜毘売・木花開耶姫)の姉妹の神話である。

是に天津日高日子番能邇邇芸能命、笠沙の御前に、麗しき美人に遇ひたまひき。爾に「誰が女ぞ。」と問ひたまへば、答へ白ししく、「大山津見神の女、名は神阿多都比売、亦の名は木花佐久夜毘売と謂ふ。」とまうしき。又、「汝の兄弟有りや。」と問ひたまへば、「我が姉、石長比売在り。」と答へ白しき。故、其の父大山津見神に、乞ひに遣はしたまひし時、大く歡喜びて、其の姉石長比売を副へ、百取の机代の物を持たしめて、奉り出しき。故爾に其の姉は甚凶醜きに因りて、見畏みて返し送りて、唯其の弟木花佐久夜毘売を留めて、一宿婚為たまひき。爾に大山津見神、石長比売を返したまひしに因りて、大く恥ぢて、白し送りて言ひしく、「我が女二たり並べて立奉りし由は、石長比売を使はさば、天つ神の御子の命は、雪零り風吹くとも、恒に石の如くに、常はに堅はに動かず坐さむ。亦木花佐久夜毘売を使はさば、木の花の榮ゆるが如榮え坐さむと宇氣比て貢進りき。此くて石長比売を返さしめて、独木花佐久夜毘売を留めたまひき。故、天つ神の御子の御寿は、木の花のあまひのみ坐さむ。」といひき。故、是を以ちて今に至るまで、天皇命等の御命長くまさざるなり。（古事記）

高天の原から新しい支配者として地上世界に降臨した天孫ホノニギから、娘との結婚の申し出を受けたオオヤマツミは、大喜びして彼に二人の娘を差し出した。ところが妹のコノハナノサクヤビメは美女だが姉のイワナガヒメは大変醜かったので、ホノニギは醜い姉を送り返し、美しい妹だけを妻にした。するとオオヤマツミは怒って、「イワナガヒメを妻とすることで、あなたの生命が石の如く永遠であるように、またコノハナノサクヤビメを妻とすることで、花の如く子孫を殖やして繁栄するようにと祈願して、二人を一緒に奉ったのに、イワナガヒメを返し、コノハナノサクヤビメだけを妻とした。だから天の神の子孫であるあなたの生命は、花の寿命のように短くなるだろう」と言った。そのためホノニギとその子孫の代々の天皇の生命は、有限のものとなったという。『日本書紀』には、父の神ではなく捨てられたイワナガヒメ自身が恥じて呪いをかけたことが、次の

ように記されている。

故、磐長姫、大きに慙ちて詛ひて曰く、「仮使天孫、妾を斥けたまはずして御さましかば、生めらむ児は寿永くして、磐石の有如に常存らまし。今既に然らずして、唯弟をのみ独見御せり。故、其の生むらむ児は、必ず木の花の如に、移落ちなむ」といふ。一に云はく、磐長姫恥ぢ恨みて、唾き泣ちて曰く、「顕見蒼生は、木の花の如に、俄に遷転ひて衰去へなむ」といふ。此世人の短折き縁なりといふ。 (書紀九の2)

記紀の本文の文脈では、天皇家の死の起源のみが語られているが、「一に云はく」の異伝に「此世人の短折き縁なりといふ」とあるように、この神話もまたイザナミの神話と同様に人類の死の起源神話としての性質をもっている。醜い石と美しい花との間の選択において、石を捨て花の方を選んだために、ホノニギあるいは人間は永遠の命を失い、世代交代する——結婚し子供を生んで自分は死んでいく——運命を背負ったという。石のような醜女(イワナガヒメ)と花のような美女(コノハナノサクヤビメ)の姉妹は、人間に死を与える醜い女神であると同時に美しい生産の女神でもある大地母神・イザナミの両面的な性質の一方ずつを、それぞれが表している<sup>6)</sup>。醜い姿を嫌悪され拒絶された女神(イワナガヒメ・黄泉の国のイザナミ)は、どちらもその夫の神を呪い、人間たちに死の運命をもたらした。

イワナガヒメとコノハナノサクヤビメの神話では、死の起源が「石」対「花」、「醜」対「美」の対立によって語られていた。このような対立は、『四谷怪談』の中にも明らかに認めることができる。それは「お岩」と、伊藤家の娘「お梅」との対立である。伊右衛門は「相貌の崩れた醜い石＝お岩」と「美しい花＝お梅」との間の選択において、石を捨て花を選んだ。その結果お岩の祟りによって、「民谷の血筋、伊藤喜兵衛が根葉」に至るまでのすべての人々に死の運命がもたらされる。このことは、醜いイワナガヒメがホノニギに対して「其の生むらむ児

は、必ず木の花の如に、移落ちなむ」(書紀九の2)と言って、ホノニギの代々の子孫に至るまで死の運命を宣告したことときわめてよく似ている。また伊右衛門とお梅の祝言の日の床の中で、お梅の顔がお岩に変化したこと、またお岩の幽霊が常にお梅の守り袋を持っていることも、この二人がじつは切り離しがたく結びついた姉妹のような、一対の存在であることを表している。

ところで『四谷怪談』において、「石」対「花」、「醜」対「美」の対立はまた、「薬」対「毒」の対立としても表されている。お梅の嫁入りに先立ってまず伊右衛門のもとに、伊藤家から家伝の「血の道の名薬」が贈られて来る。しかしこれは、面体崩れ死に至る秘法の「毒薬」だった。

お榎 畏りました。○また一品のこの粉薬。これはすなはち手まへ隠居の家伝とござりまして、調合致されます血の道の名薬、お岩様におあげなされましても苦しうござりませぬと、わざ／＼遣はしましてござりまする

一方、民谷伊右衛門の家にも「ソウキセイ」と呼ばれる家伝の良薬があった。

伊右 その唐薬は、民谷の先祖より持ち伝へたるソウキセイ。売り買ひならば二十両、そのよけいにもなる薬種。相違ないのはその添書。さる奥医者 of 極めもある。不承であらうが利倉屋茂助、五両の代り、預つてくりやれ

ソウキセイは、売買すれば二十両以上にもなる高価な薬種で、「腰膝抜けたる難病にも、用ゆる時はその功たちまち眼前の不思議」、「難病全快」の唐薬である。『和漢三才図絵』によると「桑寄生(ソウキセイ)」とは、桑の木に寄生するヤドリギで、腰痛・癰腫(悪性の腫れ物)などを治し、母胎を安定させ産後の余疾を取り去るが、真の物は手に入れ難いとある<sup>7)</sup>。桑の木が、それを

伝って太陽が再生する神木であるとされている(『山海経』海外東経など)ことは、日本でもよく知られている。またその桑を食べて生きる(桑寄生)蚕も、脱皮と変態を繰り返すところから再生する存在と見なされてきた。したがって「ソウキセイ」は、一方の伊藤家の「死をもたらす毒薬」とは正反対の、「再生あるいは不死をもたらす妙薬」として価値付けられているのではないと思われる。お梅の乳母から「毒薬」を受け取った直後に、伊右衛門は家伝の「良薬・ソウキセイ」を、借金のかたとして質屋へ手渡し失ってしまう。このことは、お岩を捨て伊藤家の「毒薬＝お梅」を手に入れることと引き替えに、ここで伊右衛門が失うものが「ソウキセイ＝不死」であるということをはっきりと指し示している。それはかつてホノニギが、石を捨て花を選んで「不死」を失ったことと同様である。

ところでお岩が打ち付けられた戸板の裏側には、民谷家に仕えていた小仏小平の死体が打ち付けられていた。小平は病床にあるかつての主君(小塩田又之丞)に飲ませるために、伊右衛門から難病全快の薬ソウキセイを盗んで捕まり、殺害されたものである。後述するように小平の役は、「お岩の役者の早変わり」によって演じられる。戸板の表側で、お岩の死霊が伊右衛門たちに死の運命を告げたとたん、戸板がくると反転し、反対側に打ち付けられた小平の幽霊が現れて、薬をくれと訴える。「戸板返し」と呼ばれるクライマックスの場面である。

お岩 民谷の血筋、伊藤喜兵衛が根葉を枯らしてこの恨み

ト守りを差し出し、見つめるゆゑ、手早く件の筵をかけて

伊右 南無阿弥陀仏へへへ。さすがは女、まだ浮かまぬか。このまゝ川へつき出したら、鳶や烏の。

ト戸板を思はず裏返す。後ろには藻をだいぶかむりし死骸ある  
ゆゑ

伊右 ヤ、そんなら後ろは

ト思ひ入れ。死骸の顔にかゝりし藻は、薄ドロへへにて、ばつ

たりと落ちる。小平の死骸、これも両目見開き  
 小平 お主の難病。薬を下され  
 トじろりと見やる。

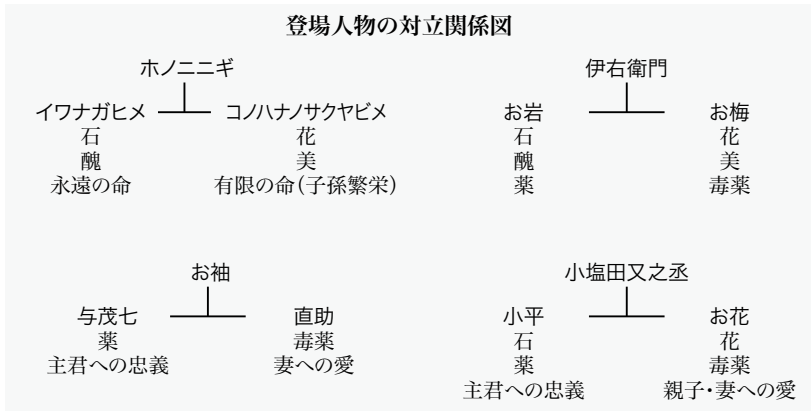
捨てられたお岩をのせた戸板の裏側から現れた小平の幽霊は、失われた「薬（ソウキセイ）」を求める。このことは、醜い岩を捨て美しい花を選んだことが、「ソウキセイ＝不死の喪失」と表裏一体であることをよく表している。お岩と小平が同一の役者によって演じられ、まったく関係のないこの二人が同じ戸板の裏表に位置付けられるのは、けっして無意味なことではないと思われる。

### 3 お岩＝小平＝与茂七の物語 ——失われたソウキセイを求めて

『四谷怪談』は、全部で三つの主な物語から構成された複雑な作品である。お岩の物語を主軸として、忠義の家臣・小仏小平の物語、仇討ちの義士・佐藤与茂七の物語が、互いに絡み合いながら平行して展開する。そしてこの三つの話それぞれの中心人物である、お岩・小平・与茂七の三人は、すべて同じお岩役の役者が「一人三役」を演じることになっている。しかも小平・与茂七の話の中にも、「毒」対「薬」の対立が繰り返し現れる。つまり小平・与茂七の物語は、お岩の物語の繰り返しとしての性質を持っており、はじめに伊右衛門が「石＝薬」を捨て「花＝毒」を選んだことによって失った「ソウキセイ（不死）」を奪回するために、これらの物語の中では別の選択の可能性が試みられているようにと思われるのである。

#### (1) 与茂七／直助——お袖による選択

塩冶浪人（赤穂浪士をモデルとする）・佐藤与茂七とお袖（お岩の義妹）は夫婦だが、与茂七は主君の仇討ちをするため、小間物屋となって身を潜めてい



た。お袖に横恋慕した薬売りの直助は、夜道で与茂七を殺す。しかし実は人違いをして別人を殺していたのだが、そうとは知らぬまま、直助はお袖に夫の仇討ちの手伝いを約束し、二人は仮の夫婦となる。同じ時に民谷伊右衛門もお岩の父・四谷左門を殺し、やはり仇討ちを約束して、それまで別居していた妻・お岩と復縁した。伊右衛門や伊藤家によってお岩が殺された後、お袖のもとにお岩の櫛や着物が届くなど様々な怪異が起り、お袖は姉の死を知る。彼女は父・夫・姉の敵を討つために、それまではまだ仮の夫婦のままだった直助とついに関係を結んだ。その直後、死んだはずの夫・与茂七が、直助に拾われた仇討ちの回文状を探してお袖のもとに現れる。互いに殺そうとする与茂七と直助の間に立ったお袖は、二人それぞれに殺害の手引きをする。そこで与茂七と直助が合図とともに屏風を突き刺すと、そこにはお袖が倒れていた。彼女は二人に自分を殺させたのだった。直助は、お袖の遺品から彼女が実の妹だったことを知って自害し、与茂七はのちに、祟りによって病んだ伊右衛門を捜し出して仇討ちをする。

お岩の役者が演じる佐藤与茂七の物語は、お袖による選択の物語である。お袖の前には、選択すべき対象として「夫の与茂七と薬売りの直助」がいる。お岩の物語では、伊右衛門による「お岩とお梅」との間の選択が問題となって

いた。与茂七の物語では、選択の主体が女へ、選択の対象が男二人へと逆転しているが、「お袖」と「与茂七と直助」の関係は、「伊右衛門」と「お岩とお梅」の関係に重なり合う。

与茂七と対立する直助は、香具師の薬売りの姿で登場する。「籐八五文、奇妙」と呼び声を上げながら、「おらんだ伝法」の薬を売り歩く。おらんだ渡りの薬は、郡司正勝氏によれば鶴屋南北の作品の中では多く「毒薬」として登場するという<sup>8)</sup>。直助と与茂七との対照的な性質は、次のようにその「薬」の性質にたとえて表現されている。

お袖 （前略）わづかな金で腹立てる、ほんに貧苦なわたしらより、心のむさい直助殿。千金万金つんだとて、なんの心に従はう。ぬしは貧しい浪人でも、わたしが好いた心が金。日本中の宝をば、山につんでもかへられぬ、大事の男。この後わたしがどういふ苦患、身を切り売りにしてなりと、かはいゝ男の為と思へば、辛苦な事もござんせん。ほんに今まであたいやらしい。つけつ廻しつ無理くどき。この後ふつつりうるさい悪魔、払うたと思やこのやうな、嬉しい事はな  
いわいナ

直助 エ、それほどまでに惚れた男と

お袖 いやな男とくらべては、毒と薬の隣同士、目に見るさへもいやぢやわいの

ここでお袖は、しつこく言い寄る直助と惚れた夫とを「毒と薬の隣同士」——直助を「毒」に、与茂七を「薬」に例えて対比している。このことは、お岩とお梅の対立が「薬(ソウキセイ)」と「毒(血の道の妙薬)」の対立に重ね合わされていたことと対応しており、二人の夫の間でのお袖の選択が、やはり「薬(ソウキセイ)」の奪回に関わっていることを指し示している。お岩が櫛を残してお袖に託したのは、伊右衛門が毒の方を選んで失敗した選択のやり直し



を試みることであった。お岩の役者が、選択の対象(与茂七)として再び顔を現すのはそのためだと思われる。

与茂七と直助との間の対立は、主君に対する「忠」／「不忠」の対立によっても表される。与茂七は旧主・塩冶判官の仇討ちのために身を挺して尽くすが、一方の直助は、彼ももとは塩冶側であったにも関わらず、仇討ちには関与しようとしな。い。それどころか彼が与茂七と間違えて殺した相手は、かつての主君の息子だった。与茂七と直助は、主君への「忠義」において正反対の性質をもつ。また主従関係だけでなく家族関係についても、この二人は対照的な性質を示す。与茂七は、回文状を見られたらたとえ妻でも命を奪わねばならないと思うような、主君の仇討ちのためには家族をも犠牲する意志をもつ男である。彼が妻の死を好都合だとみなしていることはお袖が刺された直後に発せられた、次のような台詞からもはっきりとうかがうことができる。

与茂 出かした女房、そちがありかを尋ねしも、いつぞや計らず浅草にて、  
この与茂七が所持なす密書、手にとり見たる女ゆゑ、不憫ながら  
も品により、命は身どもがもらはんと、思ひをりしにかゝるなり行き。

ところが他方の直助は、お袖に嫌がられ「仮の夫婦」として関係を拒まれた境遇にありながらも、ずっと彼女のことを慕い続けていた。両者の妻に対する執着は、与茂七の場合「希薄」なものであったのに対して、直助の場合は、結果的に近親(兄妹)相姦に至るほどに「濃密」なものだったと言えるだろう。

このような与茂七と直助との間の選択において、お袖はその両方を選んだ。与茂七を切り捨てることもできず、また嫌われながらも愛し続けてくれた直助を裏切ることもできない。しかし二人の夫、つまり「薬」と「毒」、「主君への忠義」と「妻への愛情」の両方を手に入れることはできず、お袖は結局二人の手にかかって死んでいく。不死を獲得する試みは、その両方を選択することによっても成功しないということが、ここに語られているように思われる。

## (2) 小平／お花——小塩田又之丞による選択

伊右衛門の家に奉公していた小仏小平は、かつての主君にあたる塩冶浪人・小塩田又之丞に飲ませるために、民谷家伝来の名薬ソウキセイを盗んで逃走するが、連れ戻されてしまう。伊右衛門は彼にお岩殺しと姦通の罪をきせて殺害し、お岩とともに戸板の裏表に打ち付けて川に流し棄てる。死霊となったお岩と小平は、伊右衛門にお梅と喜兵衛を殺害させ、さらに伊右衛門の息子をも喰い殺す。また川で釣りをする伊右衛門の前に戸板に釘付けにされた死骸の姿で現れ、小平は死霊となってもなお「薬」を求めた。一方小平の家では、彼の帰りを待ちながら父や妻のお花が、旧主・小塩田又之丞を匿い養っていた。小塩田は塩冶判官の仇討ちに参加することを切望していたが、鶴膝風という足腰の立たない病に冒されて立ち上がることも出来ない。絶望した小塩田が切腹しようとする、小平の幽霊が現れ、質屋の蔵から盗み出したソウキセイを彼に与えた。薬を飲むやいなや病は全快し、小塩田はすつくと立ち上がる。討ち入りの義士として本望を遂げることができるようになり、死んでも尽くす「忠義の小平」を褒め称えた。

お岩の役者が演じる三つめの物語——小仏小平の物語は、彼の主君・小塩田又之丞による選択の物語である。重病の主君・小塩田又之丞は、このままでは討ち入りに参加できないような、「義士」としては「死」に等しい状態にある。その彼を復活させるために力を尽くすのは、お岩の役者が演じる「小平」と、その妻の「お花」である。ここに再び「小平＝石」と「お花＝花」の対立が現れてくる。次にあげるのは、小平の帰りを待ちながら、お花と小塩田又之丞が会話を交わす場面である。

お花 ハイ、お薬をお上がりなされませ

ト又之丞、薬を吞みながら

又之 お花、小平はまだ帰らぬか

お花 モウかれこれ三月余りになりまするゆゑ、おいとまを願つて帰る時分  
でござりますが

(中略)

又之 夫小平は雇ひ奉公、妻のそなたは女の身として夜商、その艱難の  
暮らしの中へ、かやうに長々の病氣にてのかゝり人。それをうたてく  
も思はず、よう世話しておくりやる親切。コレ、寝た間も忘却は致  
さぬぞや、忝ない〜

小塩田はお花に看病され、彼女が与えてくれる効かない薬を感謝して受け入  
れて、「薬三昧」の生活を送っていた。小平とお花はどちらも小塩田に与えるた  
めの「薬」を持っている。ところが一方の小平の幽霊が持つ薬は難病全快の  
名薬ソウキセイだが、他方のお花が与える薬はまったく効果のない、結果的には  
「義士としての死に至る薬」だった。つまりここでも「石」と「花」の対立に、「薬」  
と「毒」との対立が重ね合わされている。ここでは選択の主体が男(小塩田)、  
選択の対象が男女(小平・お花)へと変形しているが、「石」と「花」、「薬」と「毒」  
との間で、小塩田は「ソウキセイ(不死)」を奪回するための三度目の選択を  
試みることになる。

このあと小塩田のもとへ、小平の霊に操られた次郎吉(小平とお花との間の  
息子)が搔卷や蒲団を届けて来るが、それらは幽霊が質屋の蔵から盗み出し  
たものだった。そのため小塩田は、病氣が回復しないばかりか窃盗の容疑まで  
かけられ、ついに自害を決意する。すると小平の幽霊が姿を現して切腹を止め、  
彼にソウキセイを渡そうとする。ところが小平のおかげで盗賊の汚名をきせられ  
た小塩田は彼の不忠をなじり、はじめは薬を受け取ることを拒絶した。しかし小  
平がすでに死んでいて幽霊となって薬を届けに来たことを知ると、ついに小塩田  
は感謝してソウキセイを受け取り、これで討ち入りに加われると喜ぶ。薬を飲ん  
だ小塩田は「すつくと立ち上が」る。

小平 あなたの願ひを叶へんと、苦しい悲しい恐ろしい、言ふに言はれぬ  
 艱難にて、やうやう〜手に入るこの薬。それにて全快なされた上、  
 どうぞ首尾良く本望の、門出あるやうに旦那様

(中略)

又之 スリヤ倅の小平がこの世を去りし魂魄の、身どもが難病救はんと、  
 寒気を防ぐ衣類といひ、良薬までも業通にて、取得て我に与へし  
 のみか、切腹までも止めしは、死んでも尽くす忠義の心底、忘れはお  
 かぬ忝ない。さうとは知らず我等に悪名負はせし小平、憎さも憎し  
 と追い詰めて手討になせしと思ひしに、姿は幻消え失せて、はすに  
 切ったはこの卒塔婆

(中略)

又之 心尽くしのこの良薬、いかにも服せしその上にて、この一罇を大星  
 氏へ演説なさば、我が悪名も晴れし上にて、大事の供に立たんは  
 必定。氣遣ひ致すな忠義の小平、今こそ良薬服用なさん

ト孫兵衛、とつかは水を汲んで来り。又之丞、紙包の薬を呑  
 むこなし

次郎 嬉しやそれにて、未来の本望  
 (小平)

こうして小塩田は結局、「お花＝毒」の薬ではなく、「小平(お岩)＝ソウキセイ」  
 を選んだ。その結果、彼の病気は全快し「義士」としての再生を果たす。「石」  
 と「花」との間に立って、かつて伊右衛門が「花」を選んで失敗し、またお袖  
 が両方を選ぶことによって失敗した選択の問題を、小塩田は「石」を選ぶこと  
 で解決し、失われた「ソウキセイ＝不死」の獲得にここでついに成功したことにな  
 る。

一方で、小平とお花との間の対立は、「主君への忠義」／「家族への愛」  
 との間の対立としても表されているように思われる。小平は、生きている時も死

んでからもひたすら主君のために尽くすが、自分の父や、苦しい生活をしている妻・子どもの前には姿さえ現すことがない。それどころか主君のためには、子どもを操って盗品を運ばせもする。お花は、夫の幽霊が自分と子どもの前には現れてくれないことを悲しんで、最後に次のような恨み言を述べている。

お花 そんならちこの人、小平殿はありし姿をあらはして、今までこゝにみ  
やしやんしたか。妻のわたしや子の次郎吉には、なぜに逢うては下  
さんせぬ。わたしや逢ひたい、なつかしいわいナア

「忠義の小平」を称える小塩田の傍らで、お花は「右に(小平の)位牌、左に次郎吉をかゝへ」て泣いていたとある。このことは、ここで小塩田が選ばなかったもの＝「お花」が、夫婦・親子の間の「愛」を意味していたことを指し示している。小塩田は、お花によって表される「家族の愛」ではなく、小平によって代表される「主君への忠義」を選択した。そうすることによって彼は「ソウキセイ＝不死」を獲得したので、不死の奪回は、「家族の愛」を放棄することの上に成り立っているといえる。つまり「石」と「花」、「忠義」と「愛」、「永遠の命」と「子孫・家族の繁栄」とを同時に入手することはできないということが、やはりここにも表されているように見える。ところで『四谷怪談』の終幕の後に『忠臣蔵』の討ち入りの段が続くことから推測するならば、小塩田は仇討ちを果たしたあと、せつかくここで再生した生命を割腹によって結局は自ら放棄することになる。

#### 4 おわりに

お岩は、生産の女神であると同時に死の女神でもある大地母神＝イザナミの末裔であり、またお岩とお梅の一对は、そのイザナミの二つの側面を体現した女神・イワナガヒメとコノハナノサクヤビメの一对と深く結びついている。郡司正

勝氏は、「お岩」の名が古事記のイワナガヒメ以来の姦(かたま)しい女の系譜に連なることを指摘しておられるが<sup>9)</sup>、両者の関係は名前の類似にとどまらない。鶴屋南北は『四谷怪談』の物語のなかで、かつて死の運命を生じさせた神話の選択について、他の選択の可能性を模索する。お岩は、与茂七へ、小平へと姿を変えて三度舞台に出現し、そのつど伊右衛門、お袖、小塩田又之丞に対して「永遠の命」と「有限の命(子孫の繁栄)」との間の選択を迫る。そして失われた「不死」を取り戻す試みを繰り返しつつ、「不死」と「愛」とがやはりけっして両立し得ないことを提示する<sup>10)</sup>。

廣末保氏は、お岩の怨念は私的であると同時に御霊的な広がりを持ち、特定の人間たちに対する怨恨や祟りを超えた恐怖心を観客の中に引き起こすという<sup>11)</sup>。それはお岩の恐ろしさが、イザナミやイワナガヒメによって発せられた、全人類に対する「死の運命」の宣告に根ざしているからではないかと思われる。このような解釈は、複雑な『四谷怪談』をその一つの側面からながめたものに過ぎない。しかしこのように読んでみると、一見すると何の関係もないお岩と小平がなぜ同じ戸板の裏表に打ち付けられるのか、なぜお岩の役者が小平と与茂七の三役を演じなければならないのかという理由も、はじめて理解することが出来るようになるのではないだろうか。

## 注

- 1) 廣末保『四谷怪談—悪意と笑い—』岩波書店、1984年。
- 2) 高田衛『お岩と伊右衛門 「四谷怪談」の深層』洋泉社、2002年。諏訪春雄『東海道四谷怪談』白水社、1999年。藤原成一『幽霊お岩 忠臣蔵と四谷怪談』青弓社、1996年。片岡徳雄『四谷怪談の女たち 子殺しの系譜』小学館、1993年。郡司正勝「解説」『東海道四谷怪談』新潮社、1981年など。
- 3) イザナミについては、吉田敦彦『妖怪と美女の神話学』名著刊行会、1989年、『昔話の考古学』中央公論社、1992年、『縄文宗教の謎』大和書房、1993年など参照。
- 4) 本文は、郡司正勝校注『東海道四谷怪談』新潮日本古典集成（白藤本）による。文頭の「ト」字はト書きを示す。
- 5) 役者の三代目尾上菊五郎を指す。菊五郎がお岩、小平、与茂七の三役を演じる。
- 6) 吉田敦彦『昔話の考古学』中央公論社、1992年、67頁。
- 7) 寺島良安『和漢三才図会』15、平凡社東洋文庫、1990年、258-259頁。
- 8) 郡司正勝校注『東海道四谷怪談』新潮社、1981年、23頁。
- 9) 郡司正勝「解説」『東海道四谷怪談』新潮社、1981年、421頁。
- 10) 南北は、この物語を『忠臣蔵』の世界の中に組み込みながら、「忠義」というものを、「愛」の対極にある「不死」の側——現実にはあり得ないものの側——に位置付けてみせる。南北が「忠義」を現実にはあり得ないものと見なしていることは、溝口睦子先生のご教示による。記して感謝申し上げます。
- 11) 廣末保「諸譚とグロテスク—切首と墓・累とお岩」『廣末保著作集八 四谷怪談』影書房、2000年、340頁。「幽霊の変貌—東海道四谷怪談の方法」『同著作集六 悪場所の発想』1997年、242頁。